

議会の命は「勉強」です

基調講演

二元代表制と議会の監視機能

大森 彌氏 (東京大学名誉教授)

「住民が、議会の議員と首長を、直接、別々に選挙で選ぶということは、住民の代表機能が二通りになっていることであるから、これを二元的代表制と呼んでいる。」

二元的代表制とは、

①住民が、自治体の機関である首長と議会議員を別々に直接選挙で選出すること、
②首長と議員は、それぞれ、住民に対して任務遂行に関し政治責任を負っていること、
③首長と議員はともに住民のために行動するため一定の緊張関係の下に協力し合うこと、
ということ、
という要素によって成り立っている政治システムといえる。」



「住民が、議会の議員と首長を、直接、別々に選挙で選ぶということは、住民の代表機能が二通りになっていることであるから、これを二元的代表制と呼んでいる。」

講義の中で、こんな言葉も出てきました。

・昔、議員は勉強しない人の代表だった。

・議会は「住民自治の根幹をなす機関」である。

・議会の議員は責任が薄い。

・議会の命は勉強です。まず勉強して。

・議会は英語でアセンブリー。討議をするために集まってくるものの意味。しかし、議員は討議をせずに自分の主張だけ。

・議会全体の力を強める。議会は一つになろう。

・監視機能を持つ議会が、監視機能の対象になってはいけない。

二元的代表制に内在する議会と首長との対立、首長優位の制度、「チーム議会」の実現、与野党意識の克服などが話されました。

厚木市議会の各議案や請願・陳情の採決結果を見ても、議会としてどこか、会派内でさえ意見がまとま

らないのが現状である。各議員の相違は明らかである。

議員個々が住民の意見を行政に伝え、行政がそれを判断して事業を行う。さらに議員個々が監視するという役割分担がある。議会の考えを一つにまとめる必要があるのだろうか。本来、異なる意見を代表して選挙された者が集まったのが議会であるはず。それが「チーム議会」として、一つにまとまる方がいいのかどうか、大いに疑問を持つところであった。

日本共産党厚木市議員団の議会報告会

10月29日(土)13:00~

愛甲宮前公民館

11月12日(土)13:30~

依知南公民館

11月23日(水)10:00~

毛利台老人憩の家

9月議会報告や地域の問題について話し合います。ぜひご参加を!

話題あれこれ

「自衛隊は今」

自衛隊と日本はどう変わるのか

10月23日(日) アミューあつぎで「安保法制の施行で自衛隊はどう変わるのか」と私たちが直面する課題」と題して、講演・学習会が行われました。主催は「戦争法なんていらぬ!厚木・愛川・清川の会」。講演をしたのは、元陸上自衛隊レンジャー隊員・井筒高雄氏です。



自衛隊14万人の中でレンジャー部隊は5千人。その訓練は、体力検定に始まり、炎天下、重装備で20キロ走、生きたカエルや蛇を食べる生存自活、飲まず食わずでの24時間行軍、爆破・襲撃・斥候・隠密処理など。幻聴・幻覚で離脱する者、事故死する者も出る。

南スーダン派遣について安倍首相や稲田防衛

相は「戦闘地域にはいかない。PKO5原則がある」と言うが、PKO(平和維持活動)が戦闘ではないというのは世界では通用しない。現地の指揮を取るのには首相でも防衛大臣でもない。南スーダンは戦闘の激化と沈静化が繰り返されている。自衛隊の宿営地を見渡せるビルにも銃撃があった。

戦闘服で現場に立った時点で、いつでも戦闘状態、応戦して殺し殺されることになる。戦争は殺人罪を免れる。自衛隊は隊員にアンケートを行い「命令に従います」と答えさせている。「遺書」も書かせる。戦地では、憲法9条の歯止めなど効かない。

1992年にPKO法が成立したが、その時から9条違反だった。国会議員はPKOの現実をしっかり議論すべきだ。思考停止は罪だ。「知らなかった」では済まされない。私たち一人ひとりが、何を判断基準として持つかが問われている。

~~~~~

### 戦後、スカートで登呂遺跡発掘

登呂遺跡は戦中の昭和18(1943)



年、軍事工場建設の際に発見されました。戦後の昭和22年に本格的な発掘調査が行われ、弥生時代後期の住居や高床式倉庫の遺構や、農耕・狩猟・漁労のための多くの道具が次々と出土し、昭和27年に国の特別史跡になりました。

今年8月、出土品775点が重要文化財に指定され、特別展を開催しています。当時、発掘調査を行った人たちの生の声がビデオで流れています。

女学生だった人は「軍需工場で働いていた時はズボンだった。もうズボンはいやだと思って、発掘にはスカートで行きました」。確かに写真には何人かの女学生らしき人がスカートで写っています。

別の人は「物不足の時代ですから、発掘調査に行くには自分の食料を持たなければならなかった。お米がなくて小麦や大豆を持って行ったので、食事はすいとんばかりでした」と、戦後の苦しい時代の発掘調査の大変さを語っています。